

「奉教」と「吃教」のあいだ：清末及び民国期の 広東地域社会におけるキリスト教経験

著者	土肥 歩
学位授与年月日	2014-03-07
URL	http://doi.org/10.15083/00006533

論文の内容の要旨

論文題目

「奉教」と「吃教」のあいだ

—清末及び民国期の広東地域社会におけるキリスト教経験—

氏名 土肥歩

本論文は全6章及び補論において、「近現代中国におけるキリスト教史をどのように論じるべきか」という問題意識の下、中国近現代史における宗教史叙述の可能性を追求した。そして、「奉教」と「吃教」の間にあった地域社会や在外中国人社会の人びととキリスト教の関係のあり方に注意を向けた。以下、各章の内容を要約してみる。

まず、第1章「1880年代における広州格致書院の創設と地域社会」ではアメリカ長老教会布教団宣教師による教会大学設立の経緯を論じた。19世紀中葉以降、在華宣教師たちがキリスト教を布教する一手段として学校設立を重視したことは、贅言を俟たない。しかし、本章で着目した格致書院の創設の背景には、在華宣教師が抱いていた中国側の近代教育機関導入への恐れや、清仏戦争による混乱を原因とする宣教師側の意見不一致が存在していた。こうした状況下、近代教育導入を望む広東のエリート層が、教会大学運営のために設置されたアメリカ国内の董事会に働きかけ、格致書院を設置した。

つづく、第2章「清末在外中国人と中国キリスト教布教事業」では、宣教師による布教事業と中国人の関わりについて、ニュージーランド長老教会が組織した「広州郷村布教団」に注目した。ニュージーランドにおける金鉱の発見を契機として広州近辺の郷村から中国人がやってくるが、多くの移民者たちは、金鉱の衰退や排華法案成立によって出国を余儀なくされる。このとき、広州郷村布教団の創始者であるドンは中国人の流動性に着目した。一方で、在オタゴの中国人たちのなかにはこうした動きに同調する人びとも存在していた。同布教団による中国布教は、単なる宗教的動機に支えられただけでなく、在外中国人のこうした流動性を背景として、信者以外の移民者にも支えられていた側面があった。

第3章「1910年代の嶺南大学による南洋募金活動について」は、1910年代の嶺南大学中

国人教員による南洋での募金活動について考察を加えた。同校は、清末の段階で科挙廃止や新式教育導入の影響を受けて長足の発展を遂げるが、1910年代になると第一次世界大戦の勃発や、中国国内の政情不安によって大学の運営が危ぶまれるようになった。そうしたなか、嶺南大学副監督の鍾栄光は、南洋での募金活動による大学運営資金の確保を発案した。本章では、華僑の多くが嶺南大学に募金するようになった経緯や、募金活動におけるキリスト教についての言説などを分析した。

第4章「招観海の「南捐」」では広州市内にあった恵愛堂の牧師招観海に着目した。彼の特徴的な経歴は、1927年から1930年にかけて、学校と病院の建設資金を捻出するために行った南洋華僑社会での募金活動（南捐）である。本章では、これまで十分に知られることのなかった招観海の経歴と南捐の実態を解明した上で、前章で扱った嶺南大学による募金活動との連続性のうえで論じた。そして、教会のために行われた募金活動の推移を通じて、地域社会で教会を支持した人びとの存在を浮き彫りにした。

なお、補論「招観海についての覚え書き」では招観海の従兄弟に当たる招載寧への聞き取り調査の記録を収録した。民国期を生きた牧師招観海と南洋キリスト教会との関係など、招載寧の述懐は中国キリスト教史に新鮮な知見を与える。

第5章『梁発伝』各版本の異同についての考察』ではジョージ・マクニールによる伝記作品『梁発伝』について、次章の基礎作業となる考察を加えた。『梁発伝』は中国語で版を重ね、その後英語版が出版されるという複雑な経緯をたどっているが、ごくわずかな例外を除いて、これまで検討の対象となることはなかった。そのため、各版本の記述の異同を逐一分析し、異同が生じた原因にも分析を加えた。本章での考察を通じて、梁発の人間的な部分についての描写が次第に希薄化したことや、太平天国をめぐる漢語版と英語版の違いが存在したことを指摘した。

第6章「梁発の「発見」」では、梁発が地域社会の人びとに「発見」され、次第に中国近現代史的一幕を飾る人物として定着していく過程を論じた。洪秀全による拝上帝会の結成から太平天国建国の過程は、梁発による宗教冊子『勸世良言』に着想を得たことが知られている。しかし、こうした事実は、辛亥革命直後の広州地域社会のなかから強調され始めたことはあまり知られていない。本章では、前章での考察を踏まえて、梁発が地域社会の人びとに「発見」され、次第に中国近現代史的一幕を飾る人物として定着していく過程を論じた。いわば、こうした過程を通じて地域社会の教会は周縁部と関係を持ち、場合によってはそれを取り込もうとすると同時に、中国社会にとっては周縁的であるという自身のありかたを解消しようとしたのである。

以上、本論文は全6章及び補論において、「近現代中国におけるキリスト教史をどのように論じるべきか」という問題意識の下、中国近現代史における宗教史叙述の可能性を追求した。

プロテスタント諸教派が中国布教を開始してすでに200年以上の歳月を経た。ある統計によれば、2002年の段階で1600万人あまりの信者を擁するようになった。現在では、心の

よりどころとしての新旧キリスト教会が地域社会の人びとに受け入れられているという実態が新聞や報道番組で紹介されたのは記憶に新しい。これは 1950 年代の中国のキリスト教をめぐる様子とは一線を画す新しい潮流で、こうした状況に触発されて現在の中国のキリスト教をめぐる研究が活性化している。

しかし、キリスト教は、唐代の景教や明代のカトリック教会は別として、仏教、道教、儒教、イスラームに比べれば伝来の歴史が比較的新しい。それゆえ、現在の中国におけるキリスト教について今後さらなる研究が期待される一方で、「中国近現代におけるキリスト教史をどのように論じるか」という過去の歴史への関心は、キリスト教受容や仇教運動という問題（もしくは個別テーマ史）に落とし込まれるかたちで理解されがちであった。より端的に言えば、歴史研究という文脈ではキリスト教史についての解釈に制約が存在していたのである。筆者は、より学術的な宗教史研究を深化させるために、キリスト教史研究へのアプローチの一つとして、「奉教」と「吃教」のあいだに存在した人びとを描写するというかたちでいくつかの新たな見解を提示した。

周知の通り、20 世紀以降中国におけるキリスト教は、宣教師からの精神的・経済的な自立を希求し、キリスト教思想の土着化を図ろうとした。これは広州でも例外ではなかった。広州では、第 3 章と第 4 章で論じたように、地域社会や南洋華僑社会を巻き込みながら、中国人キリスト教エリートが教会大学内で躍進し、反キリスト教運動に晒されながらも教会の「自立」が模索された。本論文に即していえば、こうした教会内部の営為が教会外の世界にも影響を与えていたといえる。すなわち、本論文の第 5 章と第 6 章で、梁発が「発見」され、太平天国と中国歴代の革命がキリスト教によって接続され、中国近現代史的一幕を飾る事実として定着した過程を論じた。まさに、この一連の過程こそ、キリスト教「受容」というキリスト教史の主体的な叙述の延長線上に存在した「近代中国のキリスト教経験」のひとつだったのではないか。

もちろん、本論文ではキリスト教布教の推移に焦点を当てて議論を展開したため、本論文自体が「キリスト教史」の布教面に偏っているという批判も成立しうる。しかし、布教の足跡に沿って史料を読み解くことで、キリスト教布教やそれへの抵抗という文脈では語り尽くせない論点が多数存在していたことを確認した。近現代中国史研究で、宗教史を積極的に論じる取り組みは必ずしも通史の傍流に置かれるべきではないのである。